

# 「地域経済論」の基底としての資本蓄積論

—『資本論』第1巻第7篇第23章第5節より—

柿 本 国 弘

## I はじめに

重化学工業の圧倒的興隆に支えられた高度成長の終焉とともに、大都市圏の過密と農村圏での過疎化が「反省」され、「地域への定住」、「地方の時代」といったことが唱導されるようになってすでに久しい。「地域主義」とか「地域経済論」などがそのための理論として登場するようになった。その内容がどのようなものであるかは独自に検討しなければならぬことだが、市町村、県といった行政的自治単位、あるいは平野部、都市とか山間部、あるいはまた以前の定住圏構想が強調していたような河川といった地理的要素が、人々の生活や生産活動に結びつけられて強調されることに、そのポイントがあることはまちがいなかろう。本稿で一言しようとするいわゆる「地域経済論」が、いったいどのような対象を、どのように扱う分野であるかについては、論者によって今後しだいにとり上げられることであろうが、常識的に考えて、伝統的な農林業であるとか地場産業、都市部なら都市にかんする経済的諸問題や独自の産業（臨海部なら石油コンビナートとか、大都市近郊部なら伝統的な中小企業とか商業機能とか）などがすぐに念頭におかれよう。

しかし明確に言えることの一つは、近代資本主義の開始以来、さらにさかのぼっては古代より、地域を分かち決定的な指標が、都市と農村の区別だ、ということであろう。「社会の全経済史はこの対立の運動に要約される」（『資本論』第1巻第12章）といわれるように、両者の区別が「地域経済論」の一つの決定的な目安でありうることはまちがいのないことである。同時に、

現代資本主義社会の経済の中心的な担い手が、巨大企業を中心とした企業（資本）であるかぎり、都市経済を見るにせよ農村経済を見るにせよ、その基底に資本の活動（資本蓄積）がすえられねばならないこと、これまたまちがいのないことであろう。「地域経済論」が、経済、産業の地理的側面やそれぞれの地域の伝統、習慣といった、またその他なんらかの要因をもって考えられねばならないものであるにしても、すくなくとも資本蓄積論をおくことなしに、これが考えられないものであることは疑問の余地のないところである。

資本を運動する主体、社会の基底をなす経済的運動の主体として、その生産、流通、さらにその上に立つ総過程の各面からとらえ、これらを壮大な体系として理論化したマルクスの『資本論』は、この主体としての資本運動を、地域的視点からとりあげ、考察することをもけっして欠かしてはいない。そもそも、資本（産業、商業、銀行などの資本）が活動する場が圧倒的に都市であり、農村でないことは、考えなくとも叙述に表われるであろうから。

このように、都市問題にせよ農業問題にせよ、あるいは地場産業や漁業問題に至るまで、およそ人々の経済活動の根底に資本の蓄積活動が存するということからして、「地域経済論」の根底には、資本蓄積論がなければならないとすれば、『資本論』のどの部分に「地域経済論」の具体的内容や視点が示されているのか、という問題が生ずるであろう。私は、さしあたりこれを、『資本論』第1巻第7篇第23章第5節に求めることにしたい。これによって「地域経済論」構築のための一つの足がかりにしたい、というのが本稿の目的である。

II 『資本論』第1巻第7篇第23章  
第5節と「地域経済論」

「地域経済論」の一つの基本視点を、『資本論』第1巻第7篇第23章第5節に求めるにさいして、あらかじめ同篇の各章と節を示せば以下のとおりである。

第七篇 資本の蓄積過程

第21章 単純再生産

第22章 剰余価値の資本への転化（第1～第5節）

第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

第1節 資本構成の不変な場合に蓄積に伴う労働力需要の増力

第2節 蓄積とそれに伴う集積との進行途上での可変資本の相対的減少

第3節 相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産

第4節 相対的過剰人口の種々の存在形態、資本主義的蓄積の一般的法則

第5節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解

- a 1846—66年のイギリス
- b イギリスの工業労働者階級の低賃金層
- c 移動民
- d 恐慌が労働者階級の最高級部分に及ぼす影響
- e イギリスの農業プロレタリアート
- f アイルランド

以上のように、さいごの第5節（「例解」）を含む第23章（「資本主義的蓄積の一般的法則」）は周知のように、「この章では、資本の増大が労働者階級の運命に及ぼす影響をとり扱う」という文章で始まっている。この「労働者階級の運命」を見るばあいに、本章全体でマルクスが、基本的見地として設定している点は二つある、といってよかろう。一つは、うえの文のすぐあとに、

「この研究で最も重要な要因は資本の構成であり、またそれが蓄積過程の進行途上で受けるいろいろな変化である」といわれているように、資本蓄積の増進すなわち資本の有機的構成の高度化が、不可避的に労働者の相対的過剰化（失業）をもたらし、これが貧困の規定的要因となる、ということである。

いま一つは、これもまた周知のように、第5節のa（「1846—66年のイギリス」）の文中でいわれている、「蓄積の諸法則の十分な解明のためには、作業場の外での彼の状態、彼の食べ物や住まいの状態をも考察しなければならない」という視点である。いうまでもなく、両者をとりまとめて一言にすれば、「労働者階級の運命」を決定するのは、富（資本）の蓄積と対極的關係にある「貧困の蓄積」という事実である。余りにも有名な「貧困の蓄積」とは、マルクスによって、次のように強調されているものであった。

「しかし、剰余価値を生産するための方法はすべて同時に蓄積の方法なのであって、蓄積の拡大はすべてまた逆にかの諸方法の発展のための手段になるのである。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうであろうと、高かろうと安かろうと、悪化せざるをえないということになるのである。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をいつでも蓄積の規模およびエネルギーと均衡を保たせておくという法則は、ヘフェイストのくさびがプロメテウスを岩に釘づけしたよりももっと固く労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである」（国民文庫版③241ページ）。

第5節の「例解」は、まさに労働者階級のこの「貧困化の蓄積」が、「工業労働者の低賃金層」や「労働者階級の最高級部分」や「移動民」や「イギリスの農業プロレタリアート」

や、また「アイルランド」において、どのように見られるかを具体的にとりあげたものに他ならない。

この「例解」の部分は、マルクスやエンゲルスの他の多くの小著作と同じように、独立した一冊になるほどの、かなり多くのページ数（文庫版で110ページに達する）を割り当てられている個所である。私は、『資本論』のような偉大な古典的書物の中であって、かなり多くの理論部分が抽象的で理解が必ずしも容易でないのにくらべて、本章の本節のように、抽象論とはおよそほど遠い、日常生活上のこまごました問題、すなわち人口や産業、住宅、栄養問題など、まったくありふれた具体的問題に多量のページ数を費してわかりやすくマルクスが説明していることに注目するとともに、率直に言っている種の安堵感すらもつのである。この部分は、まさに「資本制蓄積の一般的法則」の「例解」(Illustration)なのであって、理解に困難なところはどこにもない。

政府の統計書や労働者の生活状態を扱った一般の書物を利用しながら、科学的経済学の創始者の一人マルクスが日常の経済、生活上のありふれた問題を具体的にとり扱っていることは、経済学がたんに価値や価格の変動、信用問題や地代といった大変に抽象力を要するやっかいな理論的問題にのみ限定されるのではなく、国民だれもが経験する産業や経済の動向、就職や失業の問題、また住宅や環境衛生などの日常茶飯事の問題をも扱う義務があるのだということを明示していることにおいて、経済学を身近かで楽しいものにしてくれるとともに、大いに元気づけてくれるものではなからうか。

だれでも県や市当局の作成したいわゆる官庁文献、あるいは地域経経にかんする文書などを少しでも開いて見ると、人口の動向やら、県民所得やら、財政収支やら、環境やら、地域産業やらが見たままにのべられているのに気づく。こうした見たままの事実は、経済学のような「高度」な抽象理論にとっては、一見したところあまり尊重すべきでない、卑近な現象にすぎないとして軽視しがちである。しかし仮にそうだと

しても、こうした身近な事実を、経済学の対象としてとりあげて悪いというおきてはどこにもないのである。学問としては、科学として扱う以上は、マルクスの行なっているように「貧困化」といった法則を例証する視点をふまえてのことでなければならぬことももちろんであるが、なんらかの法則的把握を目ざす視点をもちさえしているなら、身近な地域問題は経済学の対象になりうるのだということを、まずマルクスのとり扱いそのものから結論しうるのは、当然なこととはいえ指摘する意義があるだろう。

これに関連して、以上のような「身近な諸問題」を、マルクスが政府の統計や労働者の生活にかんする資料に広く当てて紹介している、その姿勢にも学ぶべき点がある、ということである。もっとも足や体を使って、しかも集団的に地域の諸問題を地道に調査することが活発に行なわれている今日の水準からすれば、マルクスは本当に地域の問題を身をもって知っていたのか、といった疑問も出ないわけではなからうが、政府や県庁などの文献、統計などをくわしく検討して地域の住民の状態を理解することじたいはどうしても必要なことである。「マルクス主義を正しいものと看なしてかからぬような」立場から、「マルクス伝」を書いたE・H・カーですら、政府資料を十分に利用したマルクスのこの姿勢には大きな賛意を呈しつつ次のようにのべている。

「マルクスは彼の材料を殆んど専ら『公衆衛生報告書』その他の『青書』<sup>ブルーブック</sup>から引き出した。何故なら、彼は当時もその他の時も、イギリスやヨーロッパ大陸の労働者階級の生活について実際に見聞していなかったからである。『資本論』のこれらの節は社会史の傑作である。マルクスの一つの失錯は、当局によるかかるのっぴきならぬ資料の細心の蒐集および公表が社会的良心の漸次的発達の一部をなすすものである。この良心が次の四半世紀において、右に述べられたような状態において、彼の予言したような一層の衰退を生み出すどころか、素晴らしい改善を生み出す

であろう、ということ認識しえなかったことである。しかし、かようにこの新しい全く非論理的な発展を予知しえなかったことを以てマルクスを責めるのは、酷であろう。彼が書いた項には、資本家の繁栄の増大は労働者の貧困の増大を意味するという『法則』以上に、経験によって確実に裏書きされるものはないように思えたのである」(E・H・カー、石上良平訳『カール・マルクス』未来社、1956年、375ページ)。

カーのマルクス「批判」はともかく、十五年戦争によって多大な国富を喪失したなかから、急速な経済「発展」、すなわち過密・過疎問題を経験したわが国の都市部の過密問題や農村部の過疎状態を見るにつけ、「例解」の部分を読む者はだれでも、百数十年も前のイギリスと現在の日本の姿がかなりの面でオーバーラップするのを禁じえないであろう。たとえ政府資料や文献を利用しての「例証」であるにせよ、マルクスの詳細な資本蓄積法則の「例解」は、おかれて資本主義化の道を歩みはじめ、しかもこの道を急速に歩んだ日本にとって、十分すぎるほどの先駆的意義をもつものだったのである。

なおここであらかじめ断っておくべきことは、私が「地域経済論」にとって「例解」を参照すべきであるというのは、この個所が今日流の「地域経済論」を理論化しているからではなく、資本蓄積論、貧困化論の「例解」として取り上げられている多くの事実が、地域(経済)問題でとりあげられるべき項目、問題点を事実において数多く示しているからだ、ということである。したがってここでは、上述のa～fの項目でのべられていることを、多少なりとも「地域」の問題にひきつけるかたちで読んでみるが必要になろう。じっさい第5節全体をとおして、都市地域、農村地域、両者を結ぶ移動民、アイルランド問題(いわば一国にとっての特別地域あるいは問題地域)などが容易に区別するのである。このように、第5節を「地域論」に関連させて読むために、上述a～fの項目を、(1)全国的に一般的な経済問題 (2)都市問題 (3)農村問題 (4)特別地域(アイルランド)問題、

というような順におきなおして分けることにしたい。また参考までに、マルクスが利用している文献もまとめてとりあげておきたい。

なお本稿では、『資本論』全体にわたる地域論についても、ましてやマルクス、エンゲルスの地域論全体についても一切検討しない。それはまた、別個の独自の課題となるであろうからである。マルクスによってとりあげられている問題の項目は、便宜的に私が番号を付して与え、その内容は要約などしないで(その必要はないので)、全部引用でもってすませることにしたい。多大の引用となるが、『資本論』のような偉大な書物では、どんな些細なところでも注目されるべきであることを考慮して、この点を御了解願いたい。利用した訳本は国民文庫版④で、引用部分にはそのページ数を付してある。

### Ⅲ 「例解」に見る「地域経済」問題

#### (一) 全国的に一般的な問題

##### ① 資本蓄積の増進(経済「成長」)

「近代社会のどの時期を見ても、最近の20年間(1846—66年のこと、引用者)ほど資本主義的蓄積の研究に好都合な時期はない。……生産の巨人的前進、しかもこの20年間の後半はまたその前半をはるかに越えるということは、すでに第四篇で十分に示唆しておいたことである」(246—247ページ)。

##### ② 人口の増大状況

「最近の半世紀間のイギリスの人口の絶対的増加は非常に大きかったにもかかわらず、その相対的増加すなわち増加率は引き続き減少した……」(247ページ)として、イングランドおよびウェールズの10年ごとの年間人口増加百分率が図示され、1.53～1.14%の範囲で増大していることが示される。

##### ④ 国富(利潤、地代など)の増大状況

「次には別の面から富の増加を見てみよう。この場合最も確かな手がかりになるのは、所得税を課される利潤や地代などの変動であ

る。課税される利潤（農業者やその他いくつかの項目は含まれていない）の増加は、大ブリテンでは1853年から1864年までに50.47%（すなわち年平均4.58%）だったが、同じ期間の人口の増加は約12%だった。課税対象になる土地（家屋、鉄道、鉱山、漁場などを含む）の賃貸料の増加は、1853年から1864年までに38%、すなわち年々35 $\frac{1}{2}$ %だったが、そのうちでは次のような項目が最も大きな割合を占めた（以下、家屋、採石場、鉱山、製鉄所、漁場、ガス製造所、鉄道の所得の増大ぶりが図示されている、引用者）。1853—1864年の期間の各4年間を比較すれば、所得の増加度は絶えず増大している」（247～8ページ）。

#### ④ 資本の集積と集中の進展

「資本の蓄積は同時に資本の集積と集中とを伴った。イングランドについては公式の農業統計はなかったが（アイルランドについてはあった）、10の州からは任意に提出されていた。それによれば、10の州では、1851年から1861年までに100エーカー未満の借地農場は31,583から26,567に減少し、したがって5,061がより大きい借地農場に合併されたという結果になった。……しかし集中が最もよく推測されるのは、1864年と1865年とのD項（借地農業者などを除外した利潤）にたいする所得税の簡単な分析からであろう。前もって言うておくと、この源泉からの所得は60ポンド以上のものが所得税を支払うのである。この課税所得は、イングランド、ウェールズ、スコットランドで1864年には95,844,222ポンド、1865年には105,435,787ポンドで、納税者数は、1864年には総人口23,891,009人にたいして308,416人、1865年には総人口24,127,003人にたいして332,431人だった」（249～50ページ）。

#### ⑤ 主要生産物と輸出入額の増大

「連合王国で生産された石炭は、1855年には61,453,079トンで、その価値は16,113,267ポンド、1864年には92,787,873トンで、その価値は23,197,968ポンド、銑鉄は、1855年には

3,218,154トンで、その価値は8,045,385ポンド、1864年には4,767,951トンで、その価値は11,919,877ポンドだった。連合王国で経営されていた鉄道は、1854年には延長8,054マイルで払込資本は286,068,794ポンド、1864年には延長12,789マイルで払込資本は425,719,613ポンドだった。連合王国の総輸出入額は、1854年には268,210,145ポンド、1865年には489,923,285ポンドだった」（251ページ）。

#### ⑥ 労働者階級の一般的状態

マルクスは、大臣グラッドストンの「人民の消費力が減退し、労働者階級の窮乏や貧困が増大しているのに、それと同時に上層階級では不断の富の蓄積と資本の不断の増大とが行なわれているということは、この国の社会状態の最も憂うつな特徴の一つである」という発言などを引用し（252ページ）、次のようにいう。

「なんとというまづい竜頭蛇尾だろう！労働者階級は相変わらず『貧乏』で、ただ、それが有産階級のために『人を酔わすような、富や力の増加』を生産したのに比例して『貧しさを少なくした』だけだとすれば、労働者階級は相対的には相変わらず貧乏なのである。貧困の極点が軽減されなかったとすれば、それは増大したのである。富裕の極点は増大したのだからである。生活手段を安くするという事について言えば、公式の統計、たとえばロンドンの孤児院の報告は、1851—1853年に比べて、1860—1862年の3年間の平均として20%の騰貴を示している。その次の3年間、1863—1865年には、肉類、バター、牛乳、砂糖、塩、石炭、その他多数の必要生活手段の累進的な騰貴が見られる」（253ページ）。

また、例の「蓄積の諸法則の十分な解明のためには、作業場の外での彼の状態、彼の食べ物や住まいの状態も考察しなければならない」（256ページ）、という指摘のあと次のように述べている。

「その前にもうひとこと、公認の受救貧民、すなわち労働者階級のなかでも労働力の販売

という自分の生存条件を失って公共の施し物で露命をつないでいる部分について、述べておきたい。公認の貧民名簿には、イングランドでは1855年に851,369人、1856年に877,767人、1865年に971,433人が記載されていた。綿花飢饉の結果、1863年と1864年にはそれぞれ1,079,382人と1,014,978人とに膨脹した。ロンドンを最も激しく襲った1866年の恐慌が、スコットランド王国よりも人口の多いこの世界市場中心地でひき起こした貧民増加率は、1866年には1865年に比べて19.5%、1864年に比べて24.4%だったが、1866年に比べての1867年の最初の数カ月間の増加率はもっと大きかった。貧民統計を分析するにあたっては次の二つの点を重視しなければならない。一方では、貧民群の干満運動は産業循環の周期的な局面変換を反映する。他方では、資本の蓄積とともに階級闘争が発展し、したがってまた労働者の自覚が発展するにつれて、受救貧民の現実の範囲について公式の統計はますます欺瞞的になる」(256~57ページ)。

⑦ イギリスの工業労働者階級の低賃銀層の栄養状態

『公衆衛生、第六次報告』から、「一般的な結果として次のようなことが判明した」としてマルクスは以下の一文を引用している。

「調査された都市労働者の諸部類のうちでは、窒素の供給が、それ以下では飢餓病が発生するという絶対的な最低限度をわずかに超過したものは、ただ一つだけだったということ、二つの部類では、窒素含有食物も炭素含有食物も両方とも供給が不足であり、ことにそのうちの一つの部類では非常に不足だったということ、調査された農業家族のうちでは、五分の一が炭素含有食物の最低必要量以下を摂取し、三分の一以上が窒素含有食物の最低必要量以下を摂取していたということ、三つの州(パークシャ、オックスフォードシャ、サマセットシャ)では、窒素含有食物の最低量に達しない不足が平均的な状態だったということ」(259ページ)。

いまま少し具体的に、工業労働者の栄養状態について次のようにいわれている。

「調査の対象になった工場労働者部類の半分、125分の60は、ビールは全然とってはならず、28%は牛乳をとっていなかった。家族当たりの流動食品の週平均は、裁縫女工の7オンスから靴下編工の24<sup>3</sup>/<sub>4</sub>オンスまでのあいだを上下した。全然牛乳をとらなかったものの過半数は、ロンドンの裁縫工であった。……栄養の最も悪い部類は、裁縫女工、絹織物工、革手袋製造工だった」(260~61ページ)。農業労働者については次のようにいわれている。

「農業労働者のうちでは、連合王国の最も豊かな部分であるイングランドのそれが最も栄養が悪かった。一般に、農業労働者のうちで栄養不良になったのはおもに女と子供だった。なぜならば、『男は自分の仕事をするために食わなければならない』からである」(259ページ)。

(二) 都市問題

① 住宅問題の階級の本質、すなわち資本蓄積の進展が一般的に居住状況を悪化させること  
「最も勤勉な労働者層の飢餓の苦痛と、資本主義的蓄積にもとづく富者の粗野または優美な奢侈的消費との内的な関連は、経済的諸法則を知ることによってはじめて明らかにされる。住居の状態についてはそうではない。偏見のない観察者ならばだれでも認めるように、生産手段の集中が大量であればあるほど、それに応じて同じ空間での労働者の密集もますますはなはだしく、したがって、資本主義的蓄積が急速であればあるほど、労働者の住居の状態はますますみじめになる。富の進展に伴って、不良建築地区の取り払い、銀行や大商店などの巨大な建物の建築、取引上の往来やぜいたくな馬車のための道路の拡張、鉄道馬車の開設、等々による諸都市の「改良」(improvements)が行なわれ、そのために目に見えて貧民はますます悪い、ますます

ぎっしり詰まった片すみに追い込まれる。他方では、だれでも知っているように、住宅の高価はその質に反比例するのであって、貧困という鉱山は、かつてポトシの鉱山が採掘された時よりももっと多くの利潤ともっと少ない費用とで家屋投機師たちの手で採掘されるのである。資本主義的蓄積の、したがってまた資本主義的所有関係一般の、敵対的な性格は、ここではあまりにも明白であって、この対象についてのイギリス政府の報告でさえも『所有とその権利』にたいする異端的な攻撃で充滿しているほどである」(263ページ)。

## ② 都市の住宅情況一般

S・ラングの文献からマルクスは次の文を引用している。

「労働者階級の住宅事情におけるほど、おおっぴらに恥知らずに人格の権利が所有の権利に犠牲にされてきたところはない。大都市はどこでも人身御供の置き場所であり、年々幾千人が貧欲のモロク（古代フェニキアの牛身の神）の贄として屠られる祭壇である」(265ページ)。

## ④ ロンドンの住宅事情

「ぎっしり詰まった住宅、あるいはまたとうてい人間の住まいとは考えられない住宅という点では、ロンドンが第一位を占めている」(265ページ)と指摘したあと、マルクスは、ドクター・ハンターの次のような一文を引用している。

「二つの点は確かである。第一に、ロンドンにはおよそ20の大きな貧民窟があって、それぞれに万人強の人間が住んでいるが、その惨状は、これまでにイングランドのどの地方でも見られたことのないほどひどいものである。そして、それはほとんどまったくその家屋設備の悪いことの結果なのである。第二に、これらの貧民窟の家屋に詰めこみすぎたぼろぼろになった状態は、20年前よりもずっとひどくなっている」「ロンドンやニューカースルの多くの地区での生活に地獄のようだ

と言っても言いすぎではない」(265ページ)。

「ロンドンでは、古い街路や家屋の『改良』とそれに伴う取り払いが進み、中心部の工場や人口流入が増加し、最後に家賃が都市地代とともに騰貴するにつれて、労働者階級のいくらかよい状態にある部分も、小売商人やその他の下層中間階層の諸分子といっしょに、ますますこのひどい住宅事情の苦しみのなかに落ちこんで行く」(266ページ)。

## ④ ロンドンの高地価

「無数の『仲介業者 (middlemen)』の手を経していないような持ち家は、ロンドンにはほとんどない。すなわち、ロンドンの地価は、土地からの年収に比べて非常に高いのが常である。なぜならば、土地の買い手は、だれでも、早晩それを査定価格（強制収用の場合に審査官によって確定される価格）で再び売り払おうともくろんでいるか、また付近になにか大きな企業でもできたときに異常な値上がりでもうけようと思っているからである。その結果、満期に近い賃貸契約の買い取りが普通の商売になっている」(266ページ)。

## ⑤ イングランドの都市膨脹と人口集中

「19世紀のはじめには、イングランドには10万人の人口を数える都市はロンドンのほかに一つもなかった。わずかに五つの都市が5万以上だった。今では人口5万以上の都市が28ある。……ある工業都市または商業都市で資本が急速に蓄積されればされるほど、搾取される人間材料の流入はそれだけ急激であり、労働者の即製の住居はますますみすばらしい。こういう理由で、ニューカースル・アポン・タインは、ますます産出の多くなる採炭採鉱地方の中心地として、ロンドンに次いで住宅地獄の第二位を占めるのである。そこでは34,000人よりも少なくない人間が一室住まいをしている」(269ページ)。

「資本と労働とがあちこちに移動するために、一つの工業都市の住居状態は、今日はがまんのできるものでも明日はひどく悪いもの

になる。あるいは、都市の衛生当局が最悪の弊害を除くためについに立ち上がったこともあるかもしれない。しかし、明日はぼろぼろのアイランド人やおちおれたイングランドの農業労働者がいなごの大群のようにはいってくる。人々は彼らを穴倉や納屋に追い込むか、そうでなければ、従来は見苦しくなかった労働者の家を、住人が三十年戦争当時の宿泊兵のように次から次へと入れ替わる木賃宿にしてしまう」(270～71ページ)。

#### ⑥ 衛生問題

ドクター・サイモンの報告からの長い引用文章の中に次の一文がある。

「家庭は、最も安価に雨露がしのげる所にあるであろう。すなわち、衛生警察の効果の最もあがらない、排水が非常に悪く、汚物の最も多い、給水が最少または最悪の地区に、そして都市では光線や空気のもっと乏しい地区に、あるであろう。貧窮が食物の不足にまで及んでいるような場合には、それは必ずこのような衛生上の危険にさらされている」(262ページ)。

「産業の発達や資本の蓄積や都市の成長と『美化』とに伴って同じ勢いで弊害もまた大きくなってきたので、『名声』にたいしても遠慮しない伝染病にたいする恐慌だけからでも、1847年から1864年までに10よりも少ない衛生警察関係の法律が生み出され、また、リヴァプールやグラスゴーなどのようないくつかの都市では、不安にかられたブルジョアジーはそれぞれの市当局をつうじて干渉した。それでもなお、ドクター・サイモンは1865年の彼の報告のなかで、『一般的に言えば、イングランドでは弊害は取り締まられていない』と叫んでいる」(263～64ページ)。

ドクター・エンブルドンの言明の中から次の一文をマルクスは引用している。

「チフスの続発や蔓延の原因が人間の過度の密集やその住宅の不潔にあるということは、少しも疑う余地はない。多くの場合に労働者が住んでいる家屋は狭苦しい裏町や袋町にあ

る。それらの家は、光線、空気、広さ、清潔という点では、欠乏と不衛生とのほんとうの典型であり、およそ文明国にとっての恥辱である。夜は男も女も子供もごちゃまぜになってそこに寝る。男について言えば、夜間組と昼間組とが絶えず交替して寝るので、ほとんど寝床の冷えるひまがない。家は給水が悪く、便所はもっと悪く、不潔で、換気装置がなく、悪疫が発生しやすい状態になっている」(270ページ)。

#### ⑦ 繁栄地域の過剰生産恐慌

「本来の工業地帯では、多額の資本を通例の投下部面から貨幣市場の大中心地に駆逐した綿花飢饉によってすでに割引きされていたので、恐慌は今度はおもに金融的な性格を帯びていた。1866年5月にこの恐慌は起きたが、ロンドンのある巨大銀行の破産がその信号となり、続いて無数の金融的思惑会社が倒れた。破局に見舞われたロンドンの大事業部門の一つは、鉄船建造業だった。この事業の巨頭たちは、好景気時代に際限もなく過剰生産しただけでなく、そのうえに、信用の泉が相変らず豊かに流れ続けるだろうという見込みから、巨額の注文を引き受けていた。そこへ恐ろしい反動が起きて、それが他のロンドン諸産業でも現在すなわち1867年3月末まで続いているのである」(281ページ)。

「1866年の恐慌の余波については、トーリ党系の一新聞ら次のような抜き書きがある。忘れてならないのは、ここで取り扱われているロンドンの東部は、この章の本文で言及した鉄船建造業の所在地であるだけでなく、つねに最低限以下を支払われているいわゆる『家内労働』の所在地でもあるということである」(285ページ)。

#### (三) 農村問題

##### ① イギリス農業の発展と矛盾

「資本主義的生産・蓄積の敵対的な性格が野蛮に現われているという点では、イギリス農



業（牧畜を含む）の進歩とイギリス農業労働者の退歩とにまさるものはない。……近代的農事はイギリスでは18世紀の中ごろから始まる。といっても、生産様式の変化が出発する基礎としての土地所有関係の変革は、それよりもずっと前から始まるのであるが。底の浅い思想家だったが正確な観察者だったアーサー・ヤングの1771年の農村労働者に関する報告をとってみると、当時の農村労働者は、『豊かに暮らして富を蓄積することができた』と言われる14世紀末の彼の先行者に比べて、非常にみじめな役を演じているのであって、まして、『都市でも農村でもイギリス労働者の黄金時代』だった15世紀とは比べものにならない。だが、そんなに遠くさかのぼる必要はない』（289～90ページ）。

「次には、農村での実質労賃が1737年から1777年までにほとんど四分の一、すなわち25%下がったということが、詳しく示される。同じ時にドクター・リチャード・プライスは次のように言っている。『近代の政治は国民の上層階級に幸いしている。その結果は、おそかれ早かれこの王国全体がジェントルマンと乞食、貴族と奴隷だけから成り立つようになる、ということであろう』（290ページ）。

## ② 穀物法廃止の影響

「穀物法の廃止はイギリスの農業に異常な衝撃を与えた。非常に大規模な排水、畜舎内飼育や人工飼料植物栽培の新方法、機械的な施肥装置の採用、粘土地の新処理法、鉦物性肥料使用の増加、蒸気機関や各種の新作業機などの使用、いっそう集約的な耕作一般、これらのものがこの時代を特徴づけている。……同時に農業従事者の総数が減少したということは、すでに人々が知っているとおりである。男女両性とすべての年齢層を含めて、本来の農業者について言えば、彼らの数は1851年の1,241,269から1861年の1,163,217に減少した。……すなわち、この最近の時期には、農村労働者人口の積極的減少が、耕作面積の拡張、いっそう集約的な耕作、土地に合体さ

れた資本と土地耕作に投ぜられた資本との未曾有の蓄積、イギリス農業史上に比類のない土地生産物の増加、土地所有者の地代収入の増大、資本家的借地農業者の富の膨脹と、手を携えて進んだのである。このことを都市の販売市場の不断の急速な拡張や自由貿易の支配といっしょにしてみれば、幾多の曲折の後に最後に農村労働者が置かれた状態は、筋骨きから言えば彼を幸福に酔わせるはずのものであったのである。ところが、ロジャーズ教授の到達した結論では、今日のイギリスの農村労働者は、14世紀の後半や15世紀のその先行者はさておき、1770—1780年時代のその先行者と比べてみただけでも、その状態は非常に悪化していて、『彼は再び農奴になっており』、しかも食物も住居も悪い農奴になっているのである』（296～98ページ）。

## ③ 純農業地方の農民の栄養状態

「国民のうちの栄養のよくない部類の栄養状態についての1863年の医事調査委員会の一般的結論は、読者がすでに知っているとおりである。読者は、農村労働者家庭の一大部分の常食が『飢餓病を防ぐための』最低限度以下だということを思い出すであろう。このことが特によくあまるのは、コーンウォール、デヴン、サマセット、ウィルツ、スタッフォード、オックスフォード、パークス、ハーツのすべての純農業地方である』（301ページ）。

「イングランドの農村労働者はアイルランドのそれに比べて牛乳はたった四分の一、パンは半分しかとっていない。後者のほうが栄養状態がよいということは、すでに今世紀のはじめにA・ヤングがその『アイルランド旅行記』のなかで述べている。その原因は、ただ単に、貧乏なアイルランドの借地農業者のほうが富裕なイングランドのそれよりも比べものにならないほど人道的だということである』（303ページ）。

## ④ 農村での居住状況の悪化ぶり

ドクター・サイモンの衛生報告からの引用の

なかに次のような文がある。

「農村労働者の状態はこの点では何年も前からますます悪くなってきている。今では彼が住居を見つけだすことは、おそらく過去何百年以来そうだったよりもずっと困難であり、また見つかったとしても、それは以前に比べて彼の要求にはずっとわずかしか合わないものである。ことに最近の30年か20年のあいだに害悪は急激に大きくなってきて、農村民の住宅事情は今では極度に嘆かわしいものになっている。……彼が自分の耕す土地の上に住居を見つかるかどうか、その住居が人間向きであるか豚向きであるか、貧乏の重みを大いに軽くしてくれる小園があるかどうか、これらのいっさいは、適当な家賃を支払う用意または能力が彼にあるかどうかにかかっているのではなく、他の人々が『自分の財産を思いのままに処分する権利』をどのように行使したいと思うかにかかっているのである」(305ページ)。

「寝室が一つあるだけで、暖炉もなければ便所もなく、開き窓もなく、堀のほかには給水設備もなければ庭もない腐りかかった小屋であっても、労働者はこの不法にたいしてどうすることもできない。そして、われわれの衛生警察法は、まったく死文なのである。これらの法律の実施は、じつに、このような穴小屋を賃貸している家主自身に一任されているのである。……われわれは、例外的にいくらか明るい光景に眩惑されて、イギリス文明の汚点である諸事実の圧倒的な重みを忘れてはならないのである。現在の住居の一目で明らかかな惨状にもかかわらず、その筋の観察者たちが一様に、住宅の一般的な劣悪もその単に数的な不足に比べればまだずっと軽い害悪だという結論に達しているということは、じつに恐ろしい事態だと言わなければならない。何年も前から、農村労働者の住宅のなかの詰まりすぎは、衛生を重んずる人々にとってだけでなく、きちんとした道徳的な生活を重んずる人々のすべてにとって、深い憂慮の的だった」(308～9ページ、この一文も先と同じ

くサイモンからの引用)。

⑤ 12の州における農村労働者の住宅(小屋)の調査

「ドクター・ハンターは、純粋な農業地方だけではなくイングランドのすべての州で5,375戸の農村労働者の小屋を調査した。この5,375戸のうち2,195戸には寝室(しばしば同時に居室でもある)は一つしかなく、2,930戸には二つだけ、250戸には二つよりも多い寝室があった」(313ページ)。

12の州とは、ベッドフォードシャ、パークシャ、バッキンガムシャ、ケンブリッジシャ、エセックス、ヘリフォードシャ、ハンティンドンシャ、リンカンシャ、ケント、ノーサンプトンシャ、ウィルトシャ、ウースタシャ、である。このうち二つの部分から引用しておこう。まずハンティンドンシャのところで、日本のほうが清潔だ、とマルクスは次のように指摘している。

「この分割借地は家から遠くにあつて、家には便所がない。一家は自分の借地まで行って排池するが、または、汚い話だがここでは実際に行なわれているように、戸だなの引き出しに排泄物を入れておくかしなければならぬ。引き出しがいっぱいになれば、それを抜いて、中身の必要なところにおけるのである。日本でも生活条件の循環はもっと清潔に行なわれている」(319ページ)。

次はリンカンシャで持ち家が欲しい、ということを紹介している部分から、

「どうして彼はここに住んでいたのか? 庭があるからか? それは非常に狭い。家賃のせいかな? 家賃は高くて一週1シリング3ペンスである。自分の仕事に近いからか? いや、6マイルも離れているので、毎日往復12マイルも歩かなければならぬ。彼がそこに住んだのは、それが貸し小屋だったからであり、また、どこであろうと、家賃がいくらであろうと、どんなありさまであろうと、とにかく自分だけの小屋が欲しかったからである」(319ページ)。

⑥ 農村における「相対的過剰」人口と人口不足、都市への不断の移住

「都市への不断の移住、農業借地の集中や耕地の牧場化や機械の採用などによる農村での不断の『人口過剰化』、小屋の破壊による農村人口の不断の追い立て、これらのことが手に手を携えて進んで行く。一つの地域の人間が減れば減るほど、その地域の『相対的過剰人口』はますます大きくなり、この過剰人口が雇用手段に加える圧力も居住手段を超過する農村住民の絶対的過剰もますます大きくなり、したがって農村では局地的過剰人口と最も悪疫培養的な人間の詰めこみがますますひどくなるのである。散在する小村落や市場町での人間集団の密度の増大は、農村の表面でのむりやりの人間排出に対応している。農村労働者の数の減少にもかかわらず、しかも彼らの生産物量の増大につれて、絶えまなく進行する農村労働者の『過剰化』は、彼らの受教的貧窮のゆりかごである。ついにはやってくる彼らの受教的貧窮は、彼らの追い立ての一動機であり、彼らの住宅苦の主要な源泉であって、この住宅苦はまた最後の抵抗力を挫いて、彼らを地主や借地農業者のほんとうの奴隷にしてしまい、こうして労賃の最低限度を彼らにとっての自然法則として固定するのである。他面では、農村は、その恒常的な『相対的人口過剰』にもかかわらず、同時に人口不足である。これは、都市や鉱山や鉄道工事などへの人間流出があまりにも急激に起きる地点でただ局地的に現われるだけではなく、収穫期にも春や夏にも、非常に念入りで集約的なイギリスの農業が臨時の人手を必要とする多くの時期にどこでも見られることである。農村労働者は、農業の中位の要求にたいしてはいつでも多すぎるのであり、例外的または一時的な要求にたいしてはいつでも少なすぎるのである。それゆえ、公的な文書のなかでも、同じ場所で同じ時に労働不足と労働過剰という互いに矛盾する苦情が記されているのを見いだすのである。一時的または局地的な労働不足がひき起こすものは、けっし

て労賃の引き上げではなく、女や子供を強制することであり、この強制がますます低い年齢層に下がって行くことである。女や子供を搾取する範囲が大きくなれば、それがまた男の農村労働者の過剰化とその賃金の抑制とへの新たな手段になるのである」(323～24ページ)。

⑦ 作業隊制度（ガングシステム）

「作業隊は、10人から40人か50人までの人員、すなわち女や少年少女(13-18歳)一といっても少年はたいてい13歳で除かれる一最後に男女の子供(6-13歳)から成っている。いちばん上に立つのはガングマスター(隊の親方)で、これはどれも普通の農村労働者であり、たいていはいわゆる不良、ならずもので、だらしのない酒飲みであるが、いくらかの企業心と手腕とをもっている。……親方は農場から農場に移り歩いて、自分の隊を一年に6-8カ月働かせる。……この制度の『暗い面』は、子供や少年少女の過度労働であり、5、6マイルからしばしば7マイルも離れた農場への道を彼らが毎日往復するというひどい強行軍であり、最後に『作業隊』の風紀のわるいことである。……粗野や放埒や陽気な狂騒や卑猥きわまる無恥は作業隊に翼を与える。たいていの場合、親方は居酒屋の勘定をすませると頑丈な女に左右をささえられてよるめきながら行列の先頭に立って帰途につき、そのあとから子供や少年少女がひやかしたりみだらな歌をうたってがやがや騒ぎながらついて行く。帰り道では、フリエの言う『おおびらな性交』が毎日のように行なわれる。13歳か14歳の娘が同じ年ごろの子をはらむこともよくある」(327～29ページ)。

⑧ 沼地の干拓

「この州（リンカンシャー引用者）の大きな部分は以前は沼沢だった新しい土地か、または、前記の他の東部諸州でも見られるような、海から干拓されたばかりの陸地である。蒸気機関は排水のために奇跡を演じた。以前

の沼地や砂地が今では豊かに実る穀物と最高の地代とを生んでいる。同じことは、アックスホーム島やトレンス河沿岸の他の諸教区に見られるような人工的にできた沖積地についても言える」(326ページ)。

#### (四) 特別地域(アイルランド)問題

##### ① アイルランドの人口と農地の変動

「アイルランドの人口は1841年には8,222,664に増加していたが、1851年には6,623,985に減少し、1861年には5,850,309となり、1866年には550万となって、ほぼ1801年の水準まで減少した。この減少は飢饉年の1846年から始まったもので、アイルランドは20年足らずでその人口の $\frac{5}{16}$ 以上を失なったわけである。その移民総数は1851年5月から1865年7月までに1,591,487人を数え、1861—1865年の最近5年間の移民は50万を越えた。居住戸数は1851—1861年に52,990戸減った。1851—1861年に15—30エーカーの借地農場の数は61,000増加し、30エーカー以上のそれは109,000増加したが、全借地農場の総数は120,000減少した。したがって、この減少はもっぱら15エーカー未満の借地農場の消滅またはそれらの集中の結果だということになる」(333ページ)。

##### ② アイルランドの地域的特性＝イングランドへの人口供給地、農業利潤の増大

「発展した資本主義的生産の国であり、特に工業国であるイングランドにとっては、アイルランドに見られるような人口放出は致命的であろう。しかし、アイルランドは今ではただ幅の広い堀で区切られたイングランドの一農業地帯でしかないのであって、イングランドに穀物や羊毛や家畜を供給し、また産業と軍隊との新兵を供給しているのである。人口の減少は多くの土地を耕作の外に投げ出し、土地生産物を非常に減らし、また牧畜用地面積の拡張にもかかわらずいくつかの牧畜部門では絶対的減少を生みだし、その牧畜部門では絶えず退歩によって中断されがちな、ほと

んど言うに足りない進歩を生みだした。それにもかかわらず、住民数の減少につれて地代と借地農業利潤とは絶えず増大した」(339～40ページ)。

##### ③ アイルランド＝『人口原理』の見本

「農業以外で、工業や商業に投ぜられたアイルランドの総資本は、最近の二十年間にゆっくりと、絶えず大きく動揺しながら、蓄積された。ところが、この総資本の個々の構成部分の集積は、ますます急速に発展した。最後にこの総資本の絶対的増大はどんなにわずかでも、相対的には、すなわち人口の減少に比べれば、それは膨脹したのである。こうして、ここでは、正統派経済学にとって自説の確証のためにこれ以上けこうなものは望めないような一つの過程が、われわれの目の前で大規模に展開されているのである。すなわち、その説によれば、貧困は絶対的な人口過剰から生じ、人口の減少によって均衡が回復されるというのである。これは、マルサス派があのように賛美した14世紀半ばごろのベストとはまったく別な一つの重要な実験なのである」(341ページ)。

##### ④ 移民

「1846年にアイルランドでは飢饉が100万以上の人間を、といってもただ貧乏人だけを、殺した。この飢饉はこの国の富には少しも損害を与えなかった。その後20年間の、そして今もなお増大しつつある人口流出は、30年戦争などとは違って、人間といっしょにその生産手段をも激減させはしなかった。アイルランドの天才は、貧民をその貧困の舞台から数千マイルの遠方に追い払ってしまう一つのまったく新しい方法を発明した。合衆国に渡った移民は、残留者の旅費として毎年いくらかの金額を家に送る。今年移住する団体は、それぞれ来年は別の団体を呼び寄せる。こうして、移民は、アイルランドにとっては費用がかかるどころではなく、その輸出業の最も有利な部門の一つになっているのである」(342

ページ)。

⑥ 残された国内の労働者の状態

「国内に残った人々、つまり過剰人口から解放されたアイルランドの労働者たちにとっては、結果はどうだったか？ 相対的過剰人口は今日でも1846年以前と同様に大きいということ、労賃は同様に低くて労働苦は増してきたということ、農村の困窮が再び新しい危機を呼び起こしそうだということ、これが結果だった。その原因は簡単である。農業での革命が移民といっしょに進んだのである。相対的過剰人口の生産が人口の絶対的減少よりも速く進んだのである」(342～43ページ)。

⑥ アイルランドでただ一つの大工業（リンネル）と人口減が国内市場を狭くすること

「アイルランドのただ一つの大工業であるリンネル製造業は、成年男工を必要とすることが比較的少なく、また一般に、1861—66年の綿花騰貴以来のその膨脹にもかかわらず、人口の比較的わずかな部分しか使用していない。他のどの大工業でもそうであるように、リンネル製造業もそれ自身の部面での不断の変動によって絶えず相対的過剰人口を生みだしており、それによって吸収される人員が絶対的に増加する場合でさえもそうである。農民の貧困は巨大なシャツ工場などの台座になっており、これらの工場の労働軍の大部分は農村に散在している。われわれは、前にも述べたような、過少支払と過度労働とを『人口過剰化』の組織的手段とする家内労働体制を、ここで再び見いだすのである。最後に、人口減少は発達した資本主義的生産の国でのように破壊的な結果は伴わないにしても、それは国内市場への不断の跳ね返りなしには進行しないのである。国外移住がこの国でつくりだすすまは、地方的な労働需要を縮小するだけでなく、小売商人や手工業者や小営業者一般の収入をも減少させる」(343～44ページ)。

⑦ 政府の抑圧

「アイルランドの農村日雇労働者の状態の明瞭な記述は、アイルランドの救貧法監督官の報告書(1870年)のなかに見いだされる。銃剣や公然または隠然の戒厳状態によってやっと維持されている政府の役人として、彼らはみな、イングランドの彼らの同僚が軽蔑するような各種の用語上の顧慮を払わなければならないのであるが、それにもかかわらず、彼らは、自分たちの政府が安心して幻想にふけていることを許さないのである」(344ページ)。

⑧ 農村労働者が階級として形成されること

「じっさい、以前は農村労働者は小借地農業者と融合していて、たいていはただ大中の借地農場の後衛になっているだけで、これらの農場に自分たちの仕事を見いだしていたのである。1846年の破局以後はじめて彼らは純粋な賃金労働者の階級の一部分に、すなわち、ただ貨幣関係だけによって自分の雇い主と結ばれている特殊な一階級に、なりはじめたのである」(346ページ)。

⑨ アイルランドの劣悪な住宅事情

「1846年の彼らの住宅状態がどんなものだったかは、人々の知るとおりである。その後、それはもっと悪くなってきた。農村日雇労働者の一部分、といってもこの部分は日に日に減って行くのであるが、彼らはまだ借地農業者の地所で小屋に詰めこまれて住んでおり、その小屋のひどさは、イングランドの農村地方でわれわれの前に繰り広げられたその種の最悪のものをはるかに上回っている。そして、これは、アルスターのいくつかの地区を除けば、一般的に言えることである。南部ではコークやリマリックやキルケンニなどの諸州、東部ではウィクロウやウェクスフォードなど、中部ではキングズ・カウンティやクウィーンズ・カウンティやダブリンなど、北部ではダウンやアントリムやテイローンなど、西部ではスライゴやロスコモンやメヨやゴールウェーなどでそうである」(346～47ページ)。

⑩ 農業革命（耕地の牧場化や機械の応用など）の影響

「農業革命の第一幕は、作業農地になった小屋を、最大の規模で、また上から下された合い図にでも従うかのように、一掃してしまうことだった。こうして、多くの労働者は村落や都市に避難所を求めるよりはかはなくなった。そこでは彼らは屋根裏や穴ぐらや地下室に、最悪の地区の片すみに、ぼろくずのように投げこまれた」(347ページ)。

⑪ アイルランドとイングランドの「過剰」人口の補充のしかたの相違

「このように、救貧法監督官の報告書には、就業の不安定や不規則、労働中絶の頻発と長期継続、このような相対的過剰人口のいっさいの徴候が、それぞれアイルランドの農業プロレタリアートの苦痛として現われている。思い起こせば、われわれはイングランドの農村プロレタリアートのところでも同様な現象に出合っている。だが、両者の違いは、工業国のイングランドでは産業予備軍が農村で補充されるが、農業国のアイルランドでは農業予備軍が都市で、すなわち駆逐された農村労働者の避難所で、補充されるということである。イングランドでは農業の過剰人口が工場労働者に転化する。アイルランドでは都市に追い出された人々は、同時に都市の賃金に圧迫を加えはするが、やはり農業労働者なのであり、労働需要に応じて絶えず農村に送り返されるのである」(349ページ)。

⑫ アメリカ移住への観念

「こういうわけで、報告者たちの一様な証言によれば、暗い不満がこの階級の隊列にしみこんでいるということや、この階級が過去をなつかしみ、現在を憎み、未来に絶望し、『煽動家たちの悪い影響に左右され』、ただ、アメリカに移住するという一つの固定観念を抱いているだけだということは、少しも不思議ではないのである。これこそは、人口減少という偉大なマルサスの万能薬によって緑の

イリアン（アイルランドの旧名）が転化させられた逸楽郷なのである！」(350ページ)。

⑬ アイルランドの工場労働者の「幸福」ぶり

「アイルランドの工場労働者たちがどんなに幸福な生活を送っているか、これについては一つの例で十分である」として、マルクスは、工場監督官報告から次の一文を引用している。

「近ごろアイルランドの北部を視察したとき私を驚かしたのは、非常に乏しい資力のなかから自分の子供たちに教育を受けさせてやろうとするアイルランド人の一人の熟練労働者の労苦である。彼の口から聞いたことを彼の言葉どおりに伝えよう。彼が熟練工だということは、マンチェスター市場向けの品物の製造に使われていると言え、わかるであろう。そのジョンソンは次のように言う。私は布打ち工で、月曜から金曜までは朝6時から晩11時まで働く。土曜にはわれわれは夕方6時に終業し、また食事や休息に3時間ももらえる。私には子供が5人ある」(350～51ページ)。  
「これがアイルランドの賃金で、これがアイルランドの生活なのだ！」(351ページ)。

⑭ アイルランドの幸福のために、人口をもっと減らせと主張する支配者の議論

「だから、彼（巨大地主の一人であるロード・ダファリンのこと—引用者）は断言するのである、アイルランドは今なお人口過剰であり、移民の流れは相変わらず緩慢にすぎる、と。完全に幸福になるためには、アイルランドは少なくともさらに100万人の三分の一の労働者人口を放出しなければならぬ、と言うのである……ロード・ダファリンは約200万とは言わないで、100万のたった三分の一しか新しい瀉血を要求していないが、実際には200万くらいの放出がなければイリアンの至福千年国は建設されえないのである。その証拠は簡単に示される……すなわち、アイルランドは350万人の人口でもまだ貧乏であり、そしてその貧乏は人口過剰のせいなのだから、イングランドの牧羊場であり放牧場であるというア

イルランドの真の使命を果たすためには、その人口減はもっともっと進行しなければならないということである」(335-55ページ)。

#### IV 第5節「例解」で利用されている文献

- 『内国収入委員会第十次報告書』 ロンドン, 1866年  
『国勢調査』  
『内国収入委員会第四次報告』 ロンドン, 1860年  
『タイムズ』 1843年2月14日  
『青書「連合王国雑誌統計第六部」』 ロンドン, 1866年  
H・ロイ『取引所の理論』 ロンドン, 1864年  
H・フォーセット『イギリス労働者の経済的地位』  
『公衆衛生, 第六次報告』 ロンドン, 1866年  
S・ラング『国民的困窮』  
『公衆衛生, 第八次報告』 ロンドン, 1866年  
『セント・マーアインズ・イン・ザ・フィールズ保健官報告書』 1865年  
『公衆衛生, 第七次報告』 ロンドン, 1865年  
デュークペシオ『ベルギー労働者階級の家計予算』  
ジェームズ・E・T・ロジャーズ『イギリスにおける農業と物価の歴史』 オックスフォード, 1866年, 第1巻  
『最近の救貧税増加の理由, または労働価格と食糧価格との比較考察』 ロンドン, 1777年  
ドクター・リチャード・プライス『生残年金の考察』 W・モーガン編, ロンドン, 1803年, 第2巻  
バートン『社会の労働者階級の状態に影響する諸事情の考察』  
イーデン『貧民の状態』  
バリ『現行穀物法の必要の問題』  
『イギリスとアメリカ』 ロンドン, 1833年, 第1巻  
『ロンドン・エコノミスト』 1845年3月29日  
『1861年のイングランドおよびウェールズの人

- 口調査』  
『流刑および懲役刑に関する……委員会の報告』 ロンドン, 1863年  
『首席裁判官の覚え書』 第1巻, 第2巻  
A・ヤン『アイルランド旅行記』  
『児童労働調査委員会, 第六次報告書』 ロンドン, 1867年  
コラン『経済学』  
カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』 第2版, ハンブルク, 1869年  
ピエール・デュボン『労働者の歌』 1846年  
『農業統計, アイルランド, 摘要』 ダブリン  
『農業統計, アイルランド, 推定平均生産量を示す表』 ダブリン, 1867年  
マ・ファイ『産業的, 政治的, 社会的に見たアイルランド』 1870年  
『アイルランドにおける農業労働者の賃金に関する救貧法監督官報告書』 ダブリン, 1870年  
『農業労働者(アイルランド)報告書』 1861年3月8日  
『工場監督官報告書』 1866年10月31日  
ナッソー・Wシーニア『アイルランドに関する日記, 対話, 小論』 全2巻, ロンドン, 1868年  
ホラティウス『エポーディ, 第七』

#### V むすび

以上のように、「例解」の紹介から、「地域経済論」にとって、(1)一国の共通的な経済問題がとりあげられること (2)都市と農村が地域区分論の基軸をなすこと (3)それぞれの地域において、また全国一般的に、「労働者階級の運命」を明らかにするために、国民の経済生活上のあらゆる具体的な問題が考察の対象になる(マルクスの場合は「住居」と「食食物」が中心)といったことが、参考点として得られるのである。一言にすれば、資本蓄積の地域的展開として「地域経済」を把握することが肝要であろう、というのが本稿での主張点であった。社会の基底にある資本の蓄積活動(営利活動)が生み出すあらゆる経済問題は、それが直接に地域住民の生活

と運命にかかわるかぎり、地方自治体、ひいては国家のとりくむべき問題にならざるをえない。こうして「地域経済論」は、地方自治体、国家と不可分の関係に立つことになる。

さて、ここで紹介したマルクスの『資本論』、あるいはそれに先だち、彼の盟友であったエンゲルスが若き日に著わした『イギリスにおける労働者階級の状態』は、イギリスの支配層に、おそらく一つの大きなショックを与えたにちがいない。それかあらぬか、マルクス没後のイギリスは、冒頭のE・H・カーの発言にもあったように、社会改良の道へと大きく旋回することになる。以後今日にいたるまでのイギリスは、

帝国主義と「改良の時代」であった、と言ってよいのかもしれない。程度はかなり異なるにせよ、EC諸国から「ウサギ小屋」だの「ハタラキ蜂」だのと非難されている日本の現状は、イギリスが一世紀前からたどってきたような「改良」の道を、いやがうえにも歩まざるをえないであろう。それゆえ、この「改良」、「改革」の時代においては、資本蓄積論、「地域経済論」の果たすべき役割も、いつも新たに問い質されねばならないであろう。

—マルクスの没後100年(1883年3月死)を目前にして—

(1983年1月末記)